# は　じ　め　に

平成２８年４月に発生した熊本地震から２年９ヶ月が過ぎました。この間、「創造的な復興」(Build Back Better Than Before)」に向けて全力で取り組んできた結果、復旧は確実に進み、地震の傷跡もしだいに見えなくなりつつありますが、真の意味での復興は、まだまだこれからと言っても過言ではありません。ところが我が国では、さほど長くもないこの期間に、北部九州豪雨、西日本豪雨、北海道胆振東部地震等の大災害が発生し、日本国民の大多数にとって熊本地震が遠い過去の記憶になってしまうことが危惧されます。また、それ以上に地震被害の当事者であるはずの熊本県民自身の記憶が風化してしまうことが、心配されます。

白旗小学校では地震直後から、甲佐町蔵田教育長の「地震を子ども達にとって、『辛かった』だけのマイナスの経験にしてはいけない」という考えを受け、この未曾有の大災害で児童が受けた心の傷をいかに癒し、大地震を経験したという変えようのない事実を、児童の生きる力の育成にどのように結び付けていくかということを最大の教育課題と捉え、学校教育の方向性と具体的手立ての再構築を図ってきました。また、「地域と共にある学校」として地震で傷ついた地域のために学校は何ができるのかということを模索してきました。

その結果たどり着き現在も取り組んでいるのが、「地域に元気と笑顔を届けるプロジェクト」です。このプロジェクトには、仮設住宅や地域の介護施設に種から育てた花を届ける「フラワースマイルプロジェクト」、年賀状や暑中見舞いなどの手紙を届ける「スマイルレタープロジェクト」、体験活動で収穫したお米や唐芋などを届ける「元気米プロジェクト」などがあり、その取組の多くが、児童の自主的・自発的なボランティア活動等によって成り立っています。

この取組を通して児童は、地域に対し目に見える形で貢献をすることができました。しかし、それ以上に、児童自身が多くのものを得ることができたと感じています。お米やお花を届けにいくと、仮設住宅の方々は涙を流して「ありがとう」と感謝して下さいます。また、この取組の価値を多くの方に認めていただき、様々な賞を頂戴しました。更に、人権子ども集会で発表するという貴重な機会も得ることができました。これらの体験を通して、本校児童は、「地域の方々に、もっと元気と笑顔を届けたい」「もっと人の役に立ちたい」と考えることができるようになりました。熊本地震後の様々な取組により、大きく成長していることを感じます。

そこで、これらの取組を振り返り教育論文にまとめることで、将来、発生するであろう幾多の災害時における「児童生徒の心のケア」の一例として役立てることができればと考えました。

論文としての論理性や客観性を高めるためにも、忌憚のないご意見・ご指導をいただきますようお願いいたします。

平成３１年１月１５日

甲佐町立白旗小学校長　岩下 勇治

# 〈目次〉

**はじめに**

**Ⅰ　研究主題** ---------- 1

**Ⅱ　研究主題設定の理由**

1　教育の今日的課題から ---------- 1

2　甲佐町の方針及び本校教育目標から ---------- 1

3　児童の実態から ---------- 1

4　主題について ---------- 2

**Ⅲ　研究の構想**

1　研究の仮説について ---------- 2

2　研究構想図について ---------- 2

**Ⅳ　研究の方法**

1　視点１「英語でコミュニケーションを図りたくなる必然性の場面設定 ---------- 3

2　視点２「英語に慣れ親しむ活動の充実」 ---------- 3

3　視点３「評価の工夫」 ---------- 5

**Ⅴ　授業づくりの実際**

1　２年生の実践 ---------- 6

2　４年生の実践 ---------- 9

3　５年生の実践 ---------- １２

4　６年生の実践 ---------- １５

5　視点４「日常の中での英語に触れる機会と言語環境の工夫」 ---------- １８

**Ⅵ　研究の成果と課題**

1　研究の成果 ---------- １９

2　今後の課題 ---------- ２０

**おわりに**